

APOC 参加記

小野盛光

第 11 回アジア太平洋オリエンテーリングカーニバル (APOC) がオーストラリア キューズランド州ワーウィックとスタンソルーベで開催された。

(1) 開催地の位置・気候

ワーウィック、スタンソルーベは共にオーストラリア東海岸に沿って走る山脈の西側にあり、南はニューサウスウェールズ州に接する町である。ブリスベンから約 160km 南西に位置し、緯度は沖縄とほぼ同じであり、冬の今でも温暖。朝、霜が降りた日もあったが、さほど寒さは感じなかった。星がきれいだったのも印象的。ワーウィックは酪農が盛んで、スタンソルーベのスーパーマーケットでワーウィックのチーズを売っていた。また、馬の牧場もあちこちで見られ、ロデオとバラの町でもある。一方スタンソルーベはフルーツの町。オーストラリアワインの産地の 1 つでもある。



ワーウィックのスーパーのウィンドウディスプレイ
オリエンテーリングの紹介がされています

(2) APOC の日程

7月1日	オーストラリア選手権
7月2日	オーストラリアリレー選手権
7月3日	パーク0 ウェルカムパーティ
7月4日	オーストラリア・ニュージーランド 対抗戦
7月5日	ショート0
7月7日	モデルイベント
7月8日	APOC 個人戦
7月9日	APOC リレー

【併設イベント】

7月2日と4日にはコーチングトーク、7月6日には花崗岩地域のマッピングについてのトークなどが3夜もワーウィックの高校で夜に開催された。残念ながら参加の機会はなかったが研修の場も重要なイベントである。

(3) クラスとコース

59 クラスに 25 コースと日本に比べ多くのコースが準備され、レベルにより適したコース設定をねらったものと思われた。またほとんどの A クラスにはショートコースクラスが設置されていた。私の参加した M50A は 25 コース中 7 番にレベルの高いコースであり、W21A と同じコースということで、若返った感じがした。コースの組み合わせは若年者と高齢者のコースが同じであったり、ショートコースクラスも M21AS が M-15A と同じコースであったり、JOA 主催大会ほどコースに関する考え方は厳格でないようだ(どちらが適切かは別問題として)



(5) 日本からの参加者の成績

M60A に参加した OLP 兵庫の尾上俊雄さんが安定した成績で総合 3 位に、M21AS に参加した山内亮太さんが APOC 個人戦で優勝。また志村直子さん (W21A、石井龍男さん (M45A) がイベント 3 で 4 位に入った。井上直子さん、若梅節子さんも表彰台へ。磯谷忠彦さんは最高年齢クラス (M80+A) で連日拍手を浴びた。



M21AS 優勝 山内亮太

(6) WOC 誘致活動

世界選手権を日本に誘致のため、APOC 参加国の主要メンバーにパンフレットを配布すると共に、説明。特に APOC ミーティングでのコーヒープレイクでの活動が効率的だった。また会場にポスターをはりだした。

(7) APOC ミーティング

出席者 議長団: John Brammall (オーストラリア協会 会長)、Hugh Cameron (IOF 副会長)、Hogg David (IOF コントローラ) カザフスタン (Victor さん) 中国 (馬さん) 香港 (黄さん) NZ USA カナダ (Zissos さん) オブザーバー (尾上俊雄、小野盛光)

最初に APOC の継続・改善について話し合われた。(この部分については正確でないところがあるかもしれませんが)

問題点: オリエンティアの中心である、20 代の参加が減少し (今回 APOC 個人戦の M21A エントリーは 15 名)、若者への魅力がなくなってきた。

特に具体的な対策は決まらなかったが、今後も改善を継続していくことになった。国別対抗総合団体戦についても話し合われたが、国間の年代層の相違が問題であり、決まらなかった

2004 年はカザフスタンで開催が決定 (7 月に東部地域での開催予定) 先回北京で開催が決まった 2002 年のカナダは 7 月 4 日~14 日 (APOC リレーは 7 月 8 日、クラシックは 7 月 10 日) にアルバータ州で開催と説明があり、参加国の了解を得た。

(8) 最後に

今回は WOC 日本開催の PR 活動なども携えての参加であり、マガジン折込要項の問題についての FAX が途中で入るなど、今までに体験しなかった APOC でした。

シモーネ圧勝、モルゲンソン秒差で制す 新種目

ワールドカップ第 8 戦・第 9 戦

フィンランド・シリーズ

観客スタンドの大歓声。真っ赤なスイストリムで飛び出してきたのはラストスタートのシモーネ・ルーダ。つい 2 分ほど前にトップタイムを塗り替えた、地元フィンランドのマリカ・ミッコラを 30 秒上回る優勝タイムを叩き出し、初のワールドカップ、ウルトラ・ショート競技を制した。

今回のワールドカップ第 9 戦で初めて採用されたウルトラ・ショート競技形式は、最近の IOF による、オリエンテーリングの観戦しやすさ向上施策の一つである。クラシカルが陸上におけるマラソンだとしたら、僅か 15 分のウィニングタイムであるウルトラショートは 100m スプリントに喩えられる。そして、100m スプリントがそうであるように、ウルトラショートにはクラシカルでは得られないような迫力と緊張感万点の要素が盛り込まれている。スタートはワールドカップ第 8 戦の前半成績を元にした、1 分間隔のスタートで最も成績のよいものがラストスタート。スタート、ゴールは陸上競技場で、スタンドの目の前がゴールレーン。そして、更に、観客は基本的にテレインの中の出入りが自由。テレイン内で世界のトップオリエンティアの競技が展開されるを間近で見ることが可能なのだ。

男子のほうは女子とは違い大接戦となった。優勝は日本シリーズでも優勝したアラン・モルゲンソン。しかし、彼から 3 位に終わったロシアの新鋭、バレンティン・ノバコブまでで 7 秒。5 位の地元フィンランドのヤニ・サラミでもほんの 18 秒差である。

今回のウルトラショートは第 8 戦前半が予選を兼ねており、上位 30 位までのみが出走可能だったため、残念ながら、日本人選手はいなかった。

ショートタイプ、ミドルタイプ、そして三日目はチェーシング・スタートだったワールドカップ第 8 戦も、フィン 5 の会場をゴールに、盛り上りを見せた。女子はウルトラショートに引き続き、シモーネが、圧勝。大歓声の中、余裕のゴールだった。一方男子は中間まで大きく後続を引き離していたバレンティン・ノボコブが後半で致命的なミスをおかしたため、大接戦となった。最後はスウェーデンのジミー・ビルクリンが同僚のニクラス・ヨハンセン、ロシアのミハイル・マムレブを僅か 2 秒でかわし、大逆転優勝を果たした。

日本人選手は 79 位の村越真が最高順位。

(山本英勝)